

あひ／＼一傘

泉鏡花作

明治四十年七月

六月くわつの太陽たいやうに、沈鐘ちんしやうの譯やくに就ついて天溪君てんけいくんのおこどとがあつた。雨あめの矢表やおもてに立たれたのは竹風君ちくふうくんで、相あひ合傘くがさの私わたしは、お庇かけでさしたるしぶきにも合あはず、いゝ子こになつて澄すまして居あれば差支さしつかへないのだけれども、紺こん蛇じやの目めの持主もちぬしに、貴方あなたは脊せいが高たかいからと、柄えを持もたせの、濡ぬれさして、是これは憚はたかり、か何なんかで懐手ふところは怪けしからない。第一だい片袖かたそで濡ぬれよう筈はずはない、となつては、令夫人れいふじんに對たいしても、好男子かうだんし嘸さぞ御迷惑ごめいわく。それも褌つまを取とつた婀娜あだなのなら、ソレ或あるひは本望ほんまうであらうけれども、對辛あひてが此この野郎やらうでは恐縮きやうしゆく千萬ばん。で一寸差出ちよつとさしてます。ヤ、傘からかさのお化ばけ、なんて言いつては不可いけない。

天溪君てんけいくんの罵ののしられたのは、譯中やくちゆうラウテンデラインの對話たいわが、女學生上りぢやがくせいあがの看護婦かんごふか、賣春婦ばいしゆんぷのやうだがある。其その言葉ことばがもし共通そのとほりであるとすると、すれば、聊も竹風君ちくふうくんの過失くわしつではない、殘のこらず私わたしの越度をちどである。

まづこれを断つて——それから天彦君は、や
まとに載せた第一齣の其の一を讀んで、ふき出さ
れたさうだが、いや、其の段は御無理はない。何處
か其處等の山の中で、あの位な年ごろの娘が、岩の
上に足を投出して、目の前に飛んで居る蜂をつかま
へて、「まあ、お前は何處から來たの」と饒舌つて
居るのに出くはした日には、私だつてをかしい、笑
ひますとも。をかしくつて笑はなけりや、狂人だら
う、と思つて驚く。山姫だとも何んな身分だとも、
向うが前へ断つたのぢやないのだから。

しかしそんな考へで打つかる以上は、かりに此の、
「まあ、お前は何處から來たの、と云ふのを、
「こは、何處より來りしぞ、」としても、
「汝はいづかたより來りしな、」としても、
「御身は此處へ如何にして、」としても矢張り可
笑しい。

もし、蜂に向つて然う言ふ事を現に言つてゐるの
に逢へば、「お前は何處から、」と言ふより、「御
身は何方より」の方が、なほ奇怪で、恰も鶴女と申

侍る

やうで馬鹿々々しい。

勿論天溪君は、こんな考へで罵つたのではない。

串戯はよして、處で此の譯の方針は、初めから文章體でやらう、乙姫式に、と言ふのでなく、由來翻譯と云ふと――特に戯曲の譯と云ふと――原作の人物の聲を、下手な蓄音器か、拙い假聲で、も聞くやうで、霞の彼方に其の姿を見れば綺麗だが、筒服を隔て、越中を望むやうなのが少くない。其の弊のないやうに、出来ないまでも、現に其處に活きて働いて居るやうにしようと言ふ大膽な企て。

此のつもりになると、「御身は何處より」は、鶴女と申侍ることになる。これから其の仔細書を御覽に入れる。

「蜂や、お前と言へば、ねえ。」の如き――
成程、此の、

「言へば、」のあとへ、
「ねえ、」と入れた如きは、如何にも調子が甘つたるいやうで、天溪君には賣春婦のやうに聞えたのかも知れない。「蜂や」の「や、」も同じ事である。

しかし、此の、

「や」は、例の、

「あなたや」の「や」とは調子が違ふ。

「歌舞伎座へ連れてつて下さいッてばねえ」の

「ねえ」とも聲が違ふ。尤も、

「蜂、お前と言へば」とだけの方が、是よりは品
が可い。

が、此處は姫が優柔に静止した態度に於て言ふ
のではなく、ブンノ、飛んで居る蜂を避けて身動き
をしながらの言葉であるから、蜂や、お前と言へば
―― 此處へ句讀を切つて―― ねえ、とした。
此の―― 間に肩を揺るなり顔をかはすなりの科
があるので、原文のうまい處は、言語だけで、およ
そ其の人物の舉動が、自ら分るやうになつて居るの
で、此の―― 句讀が入つて、一度動いてから言ふ
「ねえ」は、決して甘つたるいものではない。

それから、

「蜂、お前と言へば」とだけの方が、見た處は品
が可い。

けれども一體此の作は、臺辭であつて、聲が通
らねばならないのに、八チオマへ、とやると一向に
蜂が聞えぬ。

其處で調子を浮かせて、

「や、」を入れた。飛んでるのが蜂でなくつて、
蝶々だと又自然舉動も言語も、もつと優婉に出来る、
すなはち、

「蝶々、お前は、」でも能く聞える。

「蝶々蝶々菜の葉に留まれ、」はいゝが、
「はち／＼花に」と遣つて御覽じろ、「胴二は遁
げだ、」と言ひたくなる。

敢て是は、辨解に都合のいゝ處ばかりを言ふので
はない。天溪君が罵評の材料に擧げた處は、何處で
も申開いて見せよう。

それから、

「さあ、牛乳よ、

」

も、所謂其の白銀嶽の、山姥の巖室の前に淺茅生
で、半ば處女、半ば成女の服装した、ラウテンデラ
インが、其の景其の時、負傷者のハインリヒを其の

言葉で慰めても、女學生上りの看護婦にはならないから、決して御心配には及ばない。

直寫の對話は、讀みながら聲を聞くべきもので、一ツツ、たとへば「知つたかぶりだツちやあない。」を、上方式に、だ、つ、ち、や、な、い、と見ながら拾ふべきものではない。

此の「さあ、牛乳よ、」云々で、姫が看護婦になつたと言ふ天溪君が、もし原文が然うであつた時、私が第一の序開きに姫に、

其の時は分れが辛いと泣いたぢやないか

なぞとサノサ節を唄はせて、其處で第一回を切つたとする。其の第一回を見たばかりの天溪君はどんなだらう。

ハウプトマン氏が美の象徴として描き成せるラウテンデラインを化して、譯者はこれを法界屋の姉さんとせり、とあつて、其の時は抱腹絶倒處ぢやない、激怒するか、泣き出すだらう、或は泰西の名家の爲

めに悶死をしようかも計られぬ。

其處で第二回のはじめに、私が姫の言葉として、

「お姥さん、麓では近頃こんな唄がはやります

よ。」

とやつたら如何、姫は決して法界屋にはなりません
まい。おなじ事で、こゝに作者が、十五六の純潔な
無邪氣な、可憐な娘を寫すとする。其の娘の會話に、

娘「あの人はね、春情萌るの。」

と言はせて其のページを終つたとする。其處まで
見て、言語道斷、純潔な、無垢な娘が、苟も人に向
つて、きざしてるとは以つての外だ。全然賣春婦の
口吻である。性格はゼロだ、最早讀むに堪へず、卷
に唾して擲ちぬ、と評を書く。其のページのうらを
開けると、

母「何故そんなことを言ひます。」

娘「だつて、お隣の姉さんが、然う言ひますも

の。」

叱る方が顔を赧らめ、

母「仕様のない娘だよ、決してそんなことを言うてはなりません。」

娘「然う、なぜ？」

とあつたら何とおつしやる。些とも其の純潔に害はありませんまい。「賣春婦の口吻である」云々は取消しにしないぢや濟むまい。

話は違ふが、聲妓晩景從良一代煙花無障とさへ言ふではないか。君に一步を譲つて、此處だけは看護婦に聞えても可い、ページをかへさずして、其の然らざるのが判然する。虚々實々も活殺自在も、作者が天福の権利である、西洋の神も人の裁判は、其の一篇を完結した後でなければ出来ない。況や豫言者ならぬ批評家をや、然り況や天溪君に於てをや。

また、ラウテンデラインが自ら自分の美をとなへて、

「私の膚は茶色で美しい、綺麗、」
と言ふ意味の處がある。此處だけ讀んだら、如何なる茶人も、茶色の美婦は、お互にあやまらうでは

ありませんか。

一體作中の人格の美は、局所だけでは分るものではない。既に私なぞも、ラウテンデラインが、みづから黄金の髪と言ひ、颯とふり亂して水に映るのが、黄金の網を張つたやうで、底の魚が驚くだらう、とひとり言を言ふ原文では、術の美は然ることだけでも、大してラウテンデラインの金髪の美は感じなかつた。けれども、後に、ハインリヒの言葉で、貴女の髪は其の昔の靈泉のやうにひや／＼と手にかゝる、と言ふ處で、初めてぞつとするほど美しいと思つた。だから末永に見て下さい。其の内には、何だかむづかしい美の表象とかゞ、聊かでもあらはれて、お慰みにならうも知れぬ。

尤も對話に譯したのが悪い、なぜ、すべてを文章體か、時代世話風、淨瑠璃がゝり、謠曲の問答式にしない、といふ御説なら、それは初めから、考へも手段もまるで天溪君とは違つたのだから、いつもの創作の時のやうに、「此奴まづい」と言はれても、「何度が悪い。」と作者は言はない。相濟みません、

精々勉強はいたしますが、不束で、と申して莞爾々々、
して居る。一體此にしても、私一人の事なら決して
評者に言句は言はぬが、共譯を託された竹風君に封
して、等閑にはしないと云ふ所信だけを申出る。竹
風君に伺つた處でも、原書の封話は、鑄鐘師ハイン
リヒの住居のやうな、古代の獨逸の風ではない、篇
中の思想と共に近代のものださうだ。ラウテンデラ
インの其の棲む所も、秦の始皇帝を婦で行くやうに、
諸司百官袖を連ねて、ハ、申上げます、入らせら
れませうで齊眉かれて居る身分でない。公侯伯の姫
君處か、男爵の令嬢でさへない、豆腐屋の姉えでさ
へない。森の中の一軒家に、育てた山姥の爲には、
竈の下も焚きつける、袖を引いてぢかづけに口説く
水の精、厩の蠅、蚊、下男下女の閨中を大聲で饒舌
る森のばけものとも日に日を送つて、おくめんなく、
あいや、ゆふはいや、美しうて少い、と叫び、椗の
枝から顔を出して、は、は、は、は、は、は、と魔のや
うな笑聲を出す位。姫みづから、

「私は性悪よ、腹が立つと引掻いたり、噛みつい
たりするのよ。」

「私機嫌買ひだもの、私の帽子が私の頭にいろ／＼な形でのつかるやうに、其の日、其の日の出来心で憤つたり笑つたりする。」

して見ると、帽子さへ丁とは被らぬお轉婆さんだ。

恚うさへ言ふ。

「私は不行儀で、強情で、怠情者で、不柔順で、意地悪で、」

此の娘に「とことは」なんぞ遣らして見給へ。あら！ わが君　ー　鶴女と申侍る　ー　滑稽になるではないか。

激しきに到つては、一度逢つたばかりの男の住居へ推しかけて、足を上げて踵を見せて、寢床の中へ割込みさへする。是も事實だけ書いて見せたら、君は果してどんな考へを起すだらう。しかし原文は固より、以上の場合の譯文を御覽になつても、野卑なのは無邪氣に、不作法なのは天真に見える。其處で天溪君は共譯を罵る爲めに、坪内博士の浦島の一節を引かれたが、沈鐘のラウテンデラインは、傳說的

に、系統的に、千百年、國民の頭腦の裡に建設され
た、秩序あり、禮節あり、威嚴あり、光榮あり、平
和ある龍の都の御殿に、女王の如くおはしますもの
ではない。木登りをする乙姫があるか、冠をよこち
よに被つた乙姫があるか、引掻いたり食ついたりす
る乙姫があるか、不行儀で強情で、怠情着で意地悪
な乙姫があるかい、何うだい。

ラウテンデラインは此の野育ちの性格の中に、君
が所謂美の表象があるのだから、是を譯すのはむづ
かしい。決して私は易いと言はぬ。で序幕の初め、
蜂に對する獨白のあたりを見ては文章體にしてと言
ふつもりであつたが、讀めば讀むに従つて其の不調
和なのに難澁したゝめ、細思熟考の後に一刀兩斷し
て口語を用ゐた。で、大英斷、實は思切つてやつた
のである。他の方法で臃げに其の倂を寫して置けば、
無難な事位は知らぬではないが、それでは直裁に活
躍せしめる譯には行かず、且つ事柄は寫しても其人々
の聲が聞えぬ。但し文章體では必ずしも其の人物を
活躍させ其の聲を響かせぬと言ふのではないが、是
は御存じの劇の臺辭、舞臺に於ても、唄ふのではな

く言ふのだから、敢て乙姫調でないのを疚しとせぬ。
譯者は寧ろ、山家ことば、一種のダゝアガンマ、ヒ
ヤア、サウダツペイを用ゐて、ラウテンデラインの
せりふを譯して、其の美を發揮し得る手腕のないの
を恥辱とする。即ち、

「さあ、牛乳よ
」
の形式にした。

或は天溪君は原文が韻文であるのに、と言はれる
かも知れぬ。拙いけれども、譯の通り一寸形だけか
へて韻文體にして御覽に入れよう。

山姫

あのね、

花が戀しくば森の周圍へ、
蕾が欲しくば小川の岸へ、
其のお前、綺麗な羽で、
ついで一飛びに、
行つて御覽。

菫、蒲公英、櫻草、

花もあれば香もある、

欲しいほど蜜を吸つて、
酔つて寝ン寝が出来ますよ。

（此の寝ン寝などもお耳障りになつたかも知れぬが、小猫に顔を押しつけて、寝ン寝しようね、と言つた處で、それが、公爵の姫君でも、決して御身分には障らない。此處は峰に言ふのである。

山姥

あれら、あれら、稲妻のおゝん神、
拝みました、見えました。

やれも／＼又しては、

鳴神殿の、

いたづらかいのう。

森の精

ほるどり踏む踏む、

踏むわ踏むわ、

董合點、

蒲公英來いぢや。

踏むぞ、踏むぞ、

何でもござれの

俺は此の、

足の下へ踏みつける。

苔奴が踏まれて水をげる／＼、
草奴が踏まれてじゅう／＼泣く。

何と魔女とも、

俺が働き見てくれたか。

エイとな、エイとな、

それ此の通りぢや、

ぶつけ、ほつけ、はいさ、ほ、

それ恚の如きは徒らに白を餘さんのみ。

さて「牛乳よ、貴方」云々を、天溪君は女學生上りの看護婦と言はるのであるが、もし此の言が、女學生上りの看護婦にしては、其こそ拙劣、それがし不肖には候へども、女學生上りの看護婦の言なら恚うは書かぬ。

同じ事で坪内博士の浦島からお引きなすつた一節、まことに、お手本のやうに、「

「と翻へせば、其こそ、美は何處に在る？」

が、もつと乙姫らしく直寫風に言ひかへる手段はいくらもある。勿論、私だつて誰だつて、乙姫を書く

のに、

「まあ、お前。」
「なぜは決して言はぬ。」

「是非もなや、今更に留めんこともなか／＼に長
き別れとなるとても蓬萊の契永久に我が影忘れたま
ふなよ。」を譯して、

「では仕方無いわ、今更留めることも出来ないけ
れど、今までの眞正のラブを想つて、妾の姿を忘れ
ちや可厭よ。」

と言つてはそれこそ吹き出さずには居られない。
其のやはり、

「虱さへ春の心にさそはれて、」
と言つたり、
「わらは今宵は鯖となり、畠の芋を掘りて得させ
ん。」

と言つたら何うだらう。事柄が事柄だと、雅調が
却つてをかしくなる。一層、

「私ね、ほ／＼、た　　こに　　なつて、畠
のね、あの、お芋を掘つて上げませう。」の方がま
だしも可い。

處で、ラウテンデラインは、此のくらの事をい
ひかねない。

あまり耳馴れないと悪いから、原文の姫の言に、
風、牛蝨、などあるのは、一先づ遠慮をして置いた
けれども、校訂の分には書入れるつもりである。

博士の一科玉仕の、こゝへ天溪君の爲めに引合ひ
に出されたのは、何處のか評者が、久米の仙人の言
に、「です」とあるのを見て、冷汗を流した、と言
つたと同様、御迷惑であらう。狂言記を一寸ひらけ
ば、

「八幡大名です。」

とあるものを、作家の用意も何にも知らずに、随
分ちよろつかなのが幾干もある。評だけ見て、はゝ
あ、こゝで冷汗を流すべきか、と思ふものが、千人
に一人くらゐないとも限らぬ。批評家といふものは、
時々こんな無責任な、不埒な、愚な事を云つて酒亞
として居る。

さて、此の一節を直寫體にやり直して、ともかく
も乙姫らしくして見せよなら、思召しにはかなはず、
坪内博士にはお叱を蒙るまでも、良心に、良心には
咎めないだけにこしらへて御覽に入れる。

「では仕方ないわ今更留めることも出来ないけれど、今までの眞正のラブを想つて、妾の姿を忘れちゃ可厭よ。」
これぢや素人だ。

君が所謂抱腹絶倒は、乙姫の一節を翻した君が剽軽なる對話體の、此の場合に於てすべきであらう。

詮ずるに、君は何等かの因縁に因つて、沈鐘の譯ありと言ふ當初から、原著は固より英譯の一部分をさへ讀んだことなしに、ラウテンデラインを、迷信的に、我が浦島の乙姫と同一の性格境遇のものだと思つて居たのであらう。其處で、劈頭にあらはれた姫の言の、「まあお前は」と言ふ調子を見て、絶倒したのに相違ない。

若しそれだと、私は寧ろ君が卒倒しなかつたのを祝着に存じ奉つる。何故なら、こゝに誰かゞ兩浦島、新曲浦島の他に浦島劇を作ると言ふ噂があつて、多少注目して居た一節が公にされたとする、開卷第一、我が乙姫君の對話の調子が、

「一寸太郎さんや、浦島さんてばねえ。」
とある時、私等が一讀して抱腹絶倒する程度は、天溪君と同一である。或は以上であらうも知れぬ。が、たゞ違ふのは、其の一節を見たばかりでは、輕率に、無責任に、其の絶倒した次第を公にせぬばかりである。

もしラウテンデラインの、乙姫のそれとは、全然違つて、不柔順で強情で、然も不柔順な裡に温和があり、強情な中に愛らしき意氣があつて、食ひついたり、引掻いたりも、

「貴下だけにはそんなことはしません。」

とハイインリヒにさゞめ言するあたりを人傳にでも聞いて居なすつたら、巧拙は別として、そんなに我が封話體を絶倒するまで、不調和とは思はれなかつたらうと考へる。兎にも角にも、竹風君一人で經營されると可かつたが、餘計な私が携つただけに敢て原作の神髓を寫し得たり、とは言はぬ。其の此を辯ずる所以は、必ずしも無責任に、不用意に遺放しにしたのではないといふことだけを言明するので、少くとも、此の翻譯を讀む人の、譯はこれだけのもの

ながら、原作は嘸おもしろからう。讀んで見たい、と言ふ念は起るであらう、とだけは確に思ふ。而して、今後幾十種の沈鐘の翻譯が出ようとも、其の最良なるものに比して、竹風君の譯は、正に第二位を下らざるべきものと信ずる。

決して譯を見て、いや、西洋の詩人と言ふのも、存外つまらぬものだ。まづいもんだ、とわれ／＼が時々起すやうな不心得を越させないことだけは認めて頂きたい。ハウプトマンとて鬼神にはよもあらじ、然らば、其の共譯の、われこそは不肖なれ、我が竹風見が、原作者に對して、良心が咎めらるゝやうな事は決してない。あゝ柄にない。

一寸爰に、御覽に入れる、質兵衛と云ふ書拔きがある。

左二「モシその棒を杖にして、今いつた通りふくらはぎへちからを入れて、前へかゝんで、ソレ今のやうにかういふ身で歩行だ。

質兵衛「ハイ／＼此あんばいかネ。

左二「マアさうさ、さつ／＼とおいでなせえ。

眼七「オ、イ／＼、おとつさん／＼、是サさつきから呼んでゐるに、おめえ耳が遠いの、コレ、このぶつさうな街道を、としよりの夜みち、おめえもよつほど大たんものだぜ。サ、わしがおくつてやりやせう。

質「へエ、もしおまへのお詞と、左次郎さまのおつしやつたのとは、餘ほど相違いたしてをりますやうでござります。そしてわたくしの事をおとつさんとおつしやつては、定九郎は興一兵衛の、俵のやうにおもはれませうが、外々ならたいいのまちがびはよろしうござりますが、先刻申ますとほり、いたつて物がたいお屋敷さまでござりますゆゑ、すべて申上る事に、すこしでも間違ひがござりましては、お役人方までが越度と。

左二「なにさ質兵衛さん、それはふだんの御用向の事、狂言といふものは、先様で御ぞんじの事でも、すこしづゝかはつてするのが、かへつておなぐさみになるものでござりやす。まづサ本文の通りなら、

オノイノ親父どの、最前から呼んでゐるのに、こ
なたの耳へははひらぬのか。トやるのだが、それ
は昔風で、大縞のどてらに丸ぐけをしめて、山岡頭
巾をかぶつた拵への詞、近年は黒羽二重に緋はかた
の帯、蛇の目の傘といふ、いきにすごいこしらへで
いきやすから、ソレ詞も今風に、オノノおとつさ
んノノとしゃれていふのサ、なんでもつまる處は、
定九郎といふ浪人が百姓の親父を殺して、金を取る
といふすぢさへ通れば、詞はどうちがつてもかまは
ずにおやんなせえ、アノ（引）のどがひツつくやう
だ、眼公湯でも水でも一ばいくだつし。

質「ヘイノノかしこまりました、しかしながらか
やう申てはいかゞでござりますが、あなたがたはこ
のたび、わたくしがおたのみ申しておいてくださり
まするわけ、エノまつた私は、數代永久お出入をい
たしまする事ゆゑ、あまりしやれがましいことを申
しあげましては、後々身分にも相さはりますゆゑ、
わたくしばかりはやはり、本文の通り、申上げたう
ござりますて。

左「ア、（引） どうもならねえぞ。

見るもの也。
天溪君以て如何となす、と先づむづかしくいつて